

経営行動と宗教

－金光教における経営の教え－

Business Behavior and Religion

－Business Ethic of Konkokyo－

森 岡 孝 文*

Takafumi MORIOKA

1. はじめに

企業経営者にとって「信仰」はどんな役割を果たしているのでしょうか。冷徹なビジネスの社会においては、「信仰」を心の糧にするような経営者の会社は倒産してしまうのではないかという疑念が生じがちである。しかし、わが国の明治以降の経営史を少し紐解くと、産業化を担った多くの経営者達が儒教やキリスト教に深く帰依し、経営理念にも宗教倫理が強く反映していたことがわかる。例としては、近代日本の資本主義の父と言われた渋沢栄一は、『論語と算盤』という著書を表している。カレーやスイーツで有名な新宿の中村屋の創業者である相馬愛蔵や、岡山県倉敷にある大原美術館を設立したことで有名なクラレ創業者である大原孫三郎は、共にキリスト教の宗教倫理を活かした企業家である。意思決定とその結果をふり返ってみると、企業経営者が最善だと思ふ意思決定をしても結果が思い通りにならないこともあれば、失敗だと思ったことが、実は後の成功に繋がることもある。企業経営には、「唯一最善の解」は無いといわれている。それは、決して結果が予測できないからである。それゆえ宗教倫理を経営の意思決定の糧とする経営者も少なくないはずである。

しかし、最近の経営者の評伝を読むと、一部の経営者を除き、あえて宗教倫理に触れておらず、著名な経営者が自分の宗教倫理を語ることもない。それは、現在のわが国では、「宗教」にコメントすることは何か胡散臭いものであるかのような印象を多くの人が持っているからなのかもしれない。恐らく第二次世界大戦のわが国の敗北を機に、すべての価値観が否定されたことが大きな原因であろう。宗教を信仰している人は変わった人であるとか、宗教の内容や教えを知らないまま近づきたくないと思っている人も多いかもしれない。経営者と同様に、企業に勤務している多くの従業員も

* 経営総合学科－中小企業論

Department of Management – Small and Medium Business Theory

同じような状況である。また、多くの経営者と企業従業員が実際に宗教に対して無関心であることもその原因のひとつであるからかもしれない。

研究分野に目を向けると、宗教と経済・経営行為の関係については、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』以降、研究がすすめられている。日本を対象にしたものについてはR. N. ベラーの『徳川時代の宗教』以降、主要な研究は見られないように思われる。最近では、寺西重郎の『経済行動と宗教—日本の経済システムの誕生』がこの分野で出版されている。

本稿では、このような偏見にさらされているともいえる宗教の中で、ベラーがわが国においてどの宗教が最もピューリタニズムの宗教倫理に類似しているか分析した観点を援用し、教派神道のひとつである金光教に焦点をあて、その宗教倫理と経済・経営行為の関係を検討することにする。

2. 先行研究

2.1. マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

宗教が経済行為に及ぼした影響の代表的研究としては、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1905）がある。ヴェーバーは、資本主義がなぜ中国、インド、メソポタミヤ、エジプト等の古代文化圏や中世に絶大な勢力を誇っていたオスマントルコ等で発生せず、利息を制限したり禁止する商業上不利な地域であるヨーロッパの一地方で興隆したかという問題意識に立ち、キリスト教におけるプロテスタント特にカルヴィニズムの影響に注視した。カルヴィニズムでは、人間は神の栄光を示す道具であるという思想で、天国に行ける人間はあらかじめ決められているという「予定説」が主張されていた。信者たちは、自分が天国に行ける証を求め、それまで修道院で行われていた世俗外禁欲での反営利的労働を価値あるものとした。世俗内で同じ労働を行っている信者達の労働の結果の富も、世俗外、世俗内を問わず、労働そのものが神への召命であると考え、労働の結果の富を天国へ行ける証であると考えた。修道僧ではないカルヴィニズムの信者達は、厳しい宗教的しめつけの下、世俗内禁欲によって労働を行い、その結果としての富を蓄積することが天国へ行ける証であると考え、それが資本主義の精神である資本主義の発展を促す原動力になったとヴェーバーは解釈した。

2.2. ロバート・N・ベラーの『徳川時代の宗教』

ベラー（1985）は、日本の近代化を牽引した宗教は何かという問題意識に基づき、江戸時代の宗教について考察した。1955年にハーバード大学で初めて二学科から学位を取得した学位論文を発展させた、1957年に出版された著作である。最初の邦訳

は、堀一郎・池田昭訳『日本近代化と宗教倫理－日本近世宗教論－』（TOKUGAWA RELIGION THE VALUES OF PRE-INDUSTRIAL JAPAN）（1966）であった。その後、ペーパーバックで出版されるに際し、時代背景を考慮し、ペーパーバック版まえがきで著者が書いているように新しい副題として「近代日本の文化ツール」（THE CULTURAL ROOTS OF JAPAN）（1985）と書き直している。

ベラーは、近代化の視点から指導を受けた社会学者のタルコット・パーソンズの機能分析を用いて江戸時代の社会構造の概要を分析した上で、ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でプロテスタンティズムに見出したような資本主義の発展を促進したプロテスタンティズムに代わる日本の宗教は何かを解明する研究を行った。

ベラーは、近代産業社会を「社会体系においては経済体系に、価値体系においては経済価値に非常な重要性をおく、という特徴のある社会」と定義している。また、宗教を「究極的関心に関する人間の態度と行為」と定義している。この究極的関心は、究極的価値と関係があり、価値と意義に対する究極的脅威、つまり死を典型とする究極的挫折と関係があるとしている。

ベラーは、江戸時代の宗教の中で、特に近江における浄土真宗、二宮尊徳の報徳運動、石田梅巖の心学思想に着目した。浄土真宗については、浄土真宗の職業観および世俗内禁欲の生活態度は、西欧のプロテスタンティズムに最も類似性を持っており、プロテスタンティズムに似ていると指摘している。報徳運動については、「農民と報徳運動」という説で簡単に述べている。報徳運動は、運動の地域が限定的であるとして、その限界を指摘しながらも資本の活用と蓄積をストレートに奨励する運動であり、経済的合理化に著しい影響を示した例として取り上げている。石田梅巖については、農民の出身であり、「民衆的な神道諸宗派が心学と似た倫理的内容を持っており、農民の間で非常に強力であったと」と指摘している。石田梅巖は、京の商家で奉公し、その後、京、大阪で講釈、問答会、瞑想を行う活動を展開した。心学では、悟りとして「性を知ること」、「心を知ること」が重要であり、天地の心と一体である心を曇らせないことが重要であるとしている。そして、商人と農民の重要な倫理である儉約と節約を実践すること即ち世俗内禁欲が重視された。

2.3. 寺西重郎の『経済行動と宗教』

寺西重郎（2014）は、日本の経済システムが欧米の経済システムと異なり、なぜ現在のような形になったのかを宗教の変化と経済行動の観点からに日英比較をして研究している。

現在の日本のものづくりの特徴の基層部分が、どの時代にどのようにして成立した

かという問題意識に基づき、日本の宗教である仏教思想の変遷を詳細に分析するとともに、日本のものづくりの原点である律令体制化の官営工房のものづくりが、律令体制以降の土地制度の変遷と宗教間の変遷がかかわることにより地方に分散し、生産者と需要を結び付けたという仮説を提示している。

研究の準備作業として先行研究のヴェーバーについては、カルヴァン派の予定説と職業労働に問題を限定しすぎていること、宗教の変化の影響の結果である私有所有権を考慮していないこと、著作時期が1904～05年でその時代制約のため、その後のアジアの経済の発展などの制度と資本主義の「精神」の多様性が考慮されていないことが問題点であるとしている。ベラーについては日本と西洋との比較視点から日本のどの宗教がプロテスタンティズムに類似しているか、なぜ西洋的な超越神が制度化されなかったかという問題意識からの研究であり、鎌倉仏教などの知識が不十分で、宗教的側面から日本の近代化は十分に解明されていないという問題を指摘している。一方、寺西の研究は、西欧経済史の資本主義の発達における宗教、市民革命、土地制度の相互の関わり研究成果を反映する分析がなされていると思われる。

イギリスについては16世紀から17世紀の2世紀についてのキリスト教における宗教改革の影響を、日本については平安末期から鎌倉期にかけての天台本覚思想^(註1)および鎌倉新仏教について詳しく考察している。イギリスについては、他者を排除する経験的功利主義の影響とカルヴィニズムの予定説の影響により身近な他者に距離を置いた個人の独立を重視する個人主義が確立したとしている。一方、日本においては、仏教における易行化に注目する。「易行とは、比較的容易な宗教実践で悟りに達し、救済を受けることができるという考え」であり、対語は「難行」である。易行が仏教における悟りを開くための「難行」を伴う世俗外修行から大衆を日常的・世俗的な職業の実践へと向かわせ、職業・芸術活動への宗教的な修行の意味をもたらしたとしている。そしてこの評価者は身近な人々であり、身近な人々に評価されるための個人主義、自己達成感が世俗内宗教的求道主義の実践の中から生み出されたとしている。そして、「世俗内経済活動の正統化と他者に距離を置く個人主義・供給指導型経済」を特徴とするのがイギリス型経済システムであり、身近な人々に評価されるための生産を目指す「求道主義と他者を意識した個人主義・需要主導型経済」が日本経済システムの特徴であるとしている。日本におけるこの経済システムは、中世後期の南北朝期から室町期の京都を中心とする首都圏市場圏と地域間の流通が交通網を完成させたことによって成立したとしている。

3. 金光教について

金光教は、幕末に岡山県ではじめられた宗教である。信仰心の篤い一農民であった

赤沢文次が祟り神として恐れられていた金神を崇敬し、金神が実は、祟り神ではなく天地の親神であり「天地金乃神」であると神名を明らかにし、教祖も「金光大神」として布教がはじまった。宗教としては新興宗教として位置づけられる。

金光教の教えを知るためにまず、成り立ちの経緯、教えについて以下で詳しく見ることにする。^(注2)

3.1. 成り立ちの経緯

金光教教務本部教庁『金光大神』（2003）によれば、金光教は、川手文治によってはじめられた。川手文治は、1814年（文化11年）岡山藩占見村で父香取十平、母しもの八人兄弟次男として出生し、源七と名付けられた。12歳で浅尾蒔田藩大谷村の川手家へ養子に入り川手文治郎と改名した。養子の立場で成長しながら、庄屋の小野光右衛門から読み書きそろばん道德倫理などを2年間教わった。文治郎は、農作業に精を出し、17歳の時に村人十人で伊勢参宮、大峰山への参拝を果たした。1831年（天保2年）に義弟が誕生したが、5年後に義弟がなくなり、さらに続いて養父も亡くなった。

養父の遺言に従って姓を川手から断絶していた赤沢へと変更した。23歳で家督を相続した。結婚後26歳で長男が誕生したが、4歳で死亡した。1851年（嘉永4年）文治が38歳の時までに義弟、義父、自分の子供3人が死亡し、当時農作業を担う牛2頭が死んでしまった。

当時は、小屋や家屋を新築する際には、金神の祟りを恐れ、日柄、方角を考慮し、建築していた。文治も金神の祟りを考え、手厚く神職にお願いし、祈念したが結果的には七つの墓が築かれ、「金神七殺」の祟りを受けた結果となった。

1855年（安政二年）に文治は、大厄の42歳になり、「のどけ」という病にかかり、とても助かる見込みのない大患になった。文治の弟の次郎に文治が建築について無礼をしていると神がかりのお告げがあり、文治は心から神に「方角見て済んだと思わない」と詫び、一命をとりとめた。祟り神である金神に真摯に向き合い、金神からも真摯に向き合う人間として文治が見出だされたとされる。この金神が後に「天地金之神」と神名を明らかにし、人々を支え、助ける神であるとされた。^(注3)

3.2. 取次について

金光教では、教祖の川手文治は神から「金光大神」という神号を与えられた。大患からの回復後に家業に従事していた文治は、「天地金之神」からのお知らせ（告知）のままに農業に従事し、生産性を上げるとともに、困った人々の願いを神に祈念し、病氣平癒を実践していった。そのため、その噂を聞きつけた多くの人々が天地金之神への祈願を願いに文治を訪問した。そのため46歳の時に家業の農業をやめ、人々を

助けるための「取次」を専一にするようにと、「天地金之神」から頼まれることになる。金光教においては、神前正面に「天地金之神」を祭祀し、教祖は神前の脇で「お結界」という場に入口に向かって横向きに座り、参拝者の願いごとの取次を行っていた。現在では各地の教会でこの形式がとられ、それぞれの教会の教師が「お結界」に座し、参拝者の願いごとの「天地金之神」に取次いでいる。^(注4)

3.3. 金光教の教祖の位置づけ

金光教は、祭祀する中心の神が天地金之神である。教祖の川手文治は金光大神という神号を与えられ、生きている神である「生神」としての位置づけにある。教祖である金光大神の存在が、神も助かり、氏子も立ち行くというまさに「神あつての氏子、氏子あつての神」という神と氏子の仲介をする立場にあり、教祖がいてはじめて神がその神号を明らかにすることが可能になったとして、神が教祖に礼をいうという伝えがあった。^(注5)教祖自身が神であり、取次の場である「お結界」も神前内にある。

3.4. 金光教の死生観

金光教の祭祀する「天地金之神」は、神の中の神であり、天地の根源の神であるとされる。他の宗教、神道、仏教、キリスト教に至るまで本源の神は同じ神であり、そのため他の宗教を排撃することはない。人はみな神の子であると位置づけられる。人間をはじめ動植物すべての生命は、神の働きによって与えられ、生存が可能になっていると考える。金光教を信仰するか否かに関わらず、すべての人は神の働きを受け、その働きを理解しないために災いを受けると考える。人間と対峙する「超越神」ではない。人間は、神の魂を分けてもらい生まれてきたとされ、死により肉体は地に戻り消滅するが、魂は消滅しないという教えである。そのため、金光教には喪がない。人間は、生きていても死んでも神のもとにあり、「生き通し」と考える。『天地は語る－金光教経典抄－』の神、人間の節で以下のように教えの一部が記載されている。

- ・天地は生き通しである。天地が生きているから、人間もみな生きていられるのである。
- ・天地金乃神は、幾千万年、天地のある限りただ一つであるけど、ほかの神は年々に増える。
- ・天地金乃神は、神、仏をいとわない。神道の身の上も仏教の身の上も、区分なしに守ってやる。神道も仏教も天地の間のものであるから、何派かに派などと、宗旨論をしたり、凝り固まったりするような狭い心を持ってはいけない。心を広く持って、世界を広く考えていかなければならない。
- ・天が下の者はみな、神の氏子である。天が下に他人はない。

3.5. 修行について

修行については、荒行をする必要はなく、易行を行うことを説いている。金光教では、易行でも特に心行をせよと説いている。金光教では毎日の生活の中で、節約し、家業（仕事）をしっかりとすること、そして節約することが修行であるとしている。『天地は語る－金光教經典抄－』の修行についての節で以下のように教えの一部が記載されている。

- ・表行（わぎょう）より心行をせよ。
- ・世の中に表行をいろいろする人がある。寒行として拝んで歩いている人もあるが、心行といって、人に不足を思わないで、物事の不自由を行とし、家業を勤め、身分相応を過ぎさないよう節約し、だれにも言わないで行えば、これが心行である。
- ・世間には、水の行、火の行などがあり、いろいろの物断ちをする人もあるが、そのような行はしなくてよい。巡礼のように白い着物を着てあちらこちらを巡り歩く暇に、毎日の家業を信心の行と心得て勤め、おかげを受けるがよい。

3.6. 経済観について

まず日々の経済活動については、既述したように毎日の家業（仕事）を勤めることが修行であるとしている。その経済活動の結果としての財については、人間が経済活動を行い商売繁盛を目指すことは当たり前の欲であり、否定はしていない。また、商売については、ステークホルダーである売り手、買い手を大切にし、薄利多売を教えている。また、短期的に大金を儲けるのではなく、長期的に蓄財することの重要性を教えている。

『天地は語る－金光教經典抄－』には財の節で以下のように教えの一部が記載されている。

- ・我を放せば神になるというが、人間は、生きている間は健康繁盛を願い、農家が五穀成就を願い、商売人が商売繁盛を願うのは当たり前の欲である。我を放さなければならぬと云うて、商売人が損をしたり農家が穀物を取らなかつたり、人間が早死にをしたりしたら国はもたない。
- ・一年で金持ちになるような心になるな。先は長い。少しずつためたのは、尽きることはないが、一時に殖やしたのはなくなりやすい。信心をする者は、我欲なことをしてはならない。ぬれ手で粟のつかみ取りの気を持つな。人より一年遅れて金持ちになる気でおれ。
- ・金を人に貸し、催促をして相手を破産させたりするより、神にくり合わせを願って

あげよ。払ってもらって喜び、払って喜ぶようになれ。

また、金光教教典 理解Ⅲ 金光教祖御理解にも以下の教えが記載されている。

- ・商売をするなら、買い場、売り場というて、もとをしこむ所と売り先とを大事にせよ。人が口銭を十銭かけるものなら八銭かけよ。目先は二銭損のようでも、安うすれば数が売れるから、やはりその方が得じゃ。体はちびるものではないから働くがよい。

4. 信仰を経営に反映した経営者：ダスキンの鈴木清一

金光教の宗教倫理を経営理念に反映した経営者として、ダスキンの創業者である鈴木清一をあげることができる。ダスキンのホームページと神渡良平（2011）によれば、鈴木清一は、1911年（明治44年）に愛知県碧南市で農業を営んでいた角谷徳太郎・とくの六人兄弟のうち四男として生まれる。三歳で碧南市出身の東京在住の鈴木家の養子となった。1929年（昭和4年）に東京の私立中央商業学校を卒業し、老舗蠟問屋の合資会社川原商店東京出張所に入社した。1931年（昭和6年）に肋膜炎を患い、養母が信仰していた金光教に救われたのを契機に金光教に入信した。回復後、仕事に励み、1938年（昭和13年）に川原商店の代表社員亀岡彌三久に見込まれ、次女の三重子と結婚し、川原商店大阪本店勤務となった。大阪商法や家族の反対によって自由に信仰活動ができないこともあり、肺結核を再発し、故郷、碧南市で転地療養生活に入った。転地療養中に無一物無所有を理念とする修養団体である京都山科の一燈園の西田天香^(注6)の著書『懺悔の生活』を読み、一燈園に入園した。以後、托鉢求道の人生を歩むことを決意した。

一燈園での修行ののち、川原商店に戻り、1939年（昭和14年）に蠟の代用品として「URワックス」、翌1940年（昭和15年）に「高度ワックス」を開発した。1942年（昭和17年）には川原商店で勤務の傍ら、同業者も参加した「高度ワックス配給協議会」を発足させ、専務理事に就任した。また「高度ワックス」を原料として日本初の板の間用艶だしワックス「ビギナーズ」を開発した。

1944年（昭和19年）にユシロ航空油剤製造株式会社を設立した。同社の設立は、現在のダスキンのにおいても、争いのない「拝み合いの会社」を目指した「祈りの経営」の第一歩として位置づけられている。1945年（昭和20年）に社名をケントク産業株式会社と改め、1950年（昭和25年）に株式会社ケントクと改名し、「ケントク」を積極的に売り出した。1962年（昭和37年）にケントクの株式をジョンソンワックス社に譲渡し、結局、鈴木は、1964年（昭和39年）にケントク代表取締役を辞任することになる。ケントクの経営を続けながら、一方で、鈴木は、1958年（昭和33年）にビルメンテナンスと清掃用品販売を行う株式会社ケントク新生舎を設立し、1962年

(昭和37年)にケントク新生舎と他社による株式会社サニクリーン東京を設立した。翌1963年(昭和38年)に大阪で代表取締役山田宏を迎え、株式会社サニクリーンを設立し、業務用ダストコントロール商品を販売するとともに加盟店募集を始めた。1964年(昭和39年)に株式会社サニクリーンを株式会社ダスキンの社名を変更した。ケントクの会長を辞任した鈴木は、翌1965年(昭和40年)に株式会社ダスキン代表取締役就任した。その後、契約で結ばれた米国式フランチャイズではなく、愛情と誠実で結ばれた「理念」を重視した日本式フランチャイズチェーン方式をダスキンにおいて確立する。昭和40年代に入り、ミスタードーナツ社、サービスマスター社と提携し、提携事業をスタートさせ、海外への進出を図った。

1976年(昭和51年)に藍綬褒章を受章、1980年(昭和55年)に大阪にて68歳で永眠した。生前の功績に対し、従五位勲四等瑞宝章が授与された。

鈴木清一は、青年期における肋膜炎の病氣平癒を契機として養母が信仰していた金光教に入信した。また、その後に勤務先の本店社長に見込まれその娘の娘婿となったにも関わらず、病気を再発し、無宗派無所有の修養団体である京都山科の一燈園の西田天香に師事し、大きな影響を受けた。鈴木は自らが創業したケントクを実質的には追い出されるような形で辞任するに至った。辞任後に、鈴木は手掛けていたダストコントロール事業とフードサービス事業においてダスキンをわが国初の複合的フランチャイズ企業として成功させた。鈴木は経営は、金光教の宗教理念と一燈園の運動理念を前面に表した経営であった。

4.1 鈴木清一の経営にみる宗教倫理、運動理念

ダスキンの経営理論は、「～ダスキンの今に生き続ける思想～人に、社会に、「喜びのタネまき」を。」「ダスキンは、利益追求のみならず、世の中の人に喜ばれる「喜びのタネまき」を実践し、地域の人々と喜びを分かち合い、物も心も豊かな暮らしに貢献することで、継続的な企業価値の向上を実現します。」とある。祈りの経営ダスキン経営理念として、

一日一日と今日こそは
あなたの人生が(わたしの人生が)
新しく生まれ変わるチャンスです

自分に対しては
損と得とあらば損の道をゆくこと

個人に対しては

喜びのタネまきをすること

我も他も（わたしもあなたも）

物心共に豊かになり（物も心も豊かになり）

生きがいのある世の中にあること

合掌

ありがとうございました。

経営理念の中で特に強調されているのは、「損と得とあれば損の道をゆくこと」、
「喜びのタネまき」という言葉である。

『天地は語る－金光教教典抄－』には、「信心は日々の改まりが第一である。毎日、元日の心で暮らし、日が暮れたら大晦日と思い、夜が明けたら元日と思って、日々うれしく暮らせば家庭に不和はない。」と教えている。鈴木のを直接表現したものとして『ダスキンの経営 鈴木清一のことば』（1997）によれば「創立以来の根本精神」に「食わんがために働く、あるいは金儲けだけを目的とした利潤追求だけの会社ではなく、世の中のお役に立つような道と経営も合一を願う争いなき拌み合いの会社をつくってみたい。これが会社創立以来の根本精神です。」と記されている。「損と得とあれば損の道をゆくこと」は「損得不二」という考えから説明している。この言葉は一燈園での恐ろしいこと何もないという教え、人間の死生観から説明をしている。鈴木自身が肋膜炎や肺結核という大病を克服したことから記載しているように、金光教には「死んでもままよ」あるいは一燈園での「ここには死にくるんですよ」という言葉にあらわされている。重要なのは生かされて生きていることであり、損得については、時により得することも損をすることもある。生きて経営行為をするのであれば、「どのようにして相手に喜ばれているか、あるいは本当に誠実に尽くしているか」が本質であるとしている。

金光教のご神伝の言葉の一部に「氏子あつての神、神あつての氏子、子供のことは親が頼み、親のことは子が頼み、天地のごとし。あいよかけよで頼み合いたし」がある。「あいよかけよ」の稿では、「親、先生、お友達、あるいはお客様、加盟店さん、働きさんのおかげで自分たちが今日までになったんだと思います。だからこそ「あいよかけよ」なのです。（略）一番うれしことはダスキンによって人が助かり成長することです。」と記載している。

利益については「赤字は罪悪である」としている。「経営者の仕事はバランスをとって利益をうみだすことです」としている、利益を出すために経営するのではなく世の中の役に立っているのであれば、喜びの結果として利益が生み出されると考えている。

同書は鈴木清一の言葉を収録した書であり、鈴木清一が一燈園、金光教の教えに基

づいた経営をダスキンでどのように目指したかがわかる。

5. 考察

人にとって最も重要な心配事は、死である。ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』では、まさにカルヴァン派の人間は死後に天国に行けるかどうかは、予定されているという「予定説」が大きな影響を及ぼしたことを指摘している。禁欲的に仕事をして富を蓄えることが天国に行ける証であり、職業がまさに「天職」としての地位を獲得することになった。

ベラーは、宗教を「究極的関心にかんする人間の態度と行為」と定義している。究極的関心は究極的価値と呼ぶものと関係があり、それに反するものとして死に代表される究極的脅威に関するものと関係しているとしている。宗教の第二の社会的機能としてこの究極的挫折を説明することであるとしている。浄土教諸宗派が、仏教系の宗派の中で呪術、俗信、儀礼から解放した宗教であり、その内、最も進んだ宗派が浄土真宗であると指摘している。そして、ピューリタニズムに最も近い宗教は、浄土真宗であると指摘している。浄土真宗は、現世での成仏を約束するものではなく、来世における成仏を約束し、念仏を唱えることによってなし得ることを説いている。また、宗教的運動として農民層に対する報徳運動、商人層に対する心学の影響を重視している。報徳運動と心学は、宗教組織としての教団を形成していないため、大きな影響を及ぼしているとは言えない。

ベラーは、浄土教系宗派の革新性については簡単にしか触れていないが、それに対し寺西は、浄土教系宗派の易行への進展をわが国の古代仏教から考察し、天台本覚思想の影響を明らかにしている。宗教の易行化をキーワードにし、天台本覚思想の重要性を指摘している。

ベラー、寺西ともに明治以降の宗教については、論じられていない。本稿では、日本におけるピューリタニズムの思想に近い、宗教倫理を持つ宗教として新興宗教の一つである金光教に着目した。金光教は、現在の岡山の一農民である川手文治によって、それまで崇り神として一般庶民に恐れられていた金神を深く崇拝することによって創始された。

人々の行動や建築を自由に行うことの妨げになっていた日柄や方角について、神への無礼として咎めることによって許されるとした。崇り神として考えられていた金神は、天地金乃神という神名を明らかにし、天地の親神であり、人間はその親神である神から魂を分け与えられた存在であると説いている。教祖は、易行として「心行」を信者に説き、日々の生活の中で行を行うこと、「家業の行」を行うことを説いている。教祖自身も農業を営み、生計を立てていた。農業を通じて神からのお告げにより、他

の人とは異なる害虫駆除や農作業をし、大きな収穫をあげていた。時代的制約のために「家業」という言葉が使われているが、「家業」は現在の「仕事」あるいは「職業」に置き換えることができる。教典には、すでに見てきたように経済・経営にかかわる教えが記載されている。日々の生活の中での修行をする易行である「心行」を勧め、生活の糧を稼ぐための経済行為を認め、短期的な儲けより長期的な視点に立って事業を営むこと等を日々の生活、日々の経済活動にわたり教えを説いている。

宗教が経営に対するかかわりとしては、宗教的な教えを経営者が宗教家から直接教えを受ける形式として、一時的に出家をして修行の後に還俗する形式があるが、出家は職業継続の困難を伴うため限られた人にしか可能ではない。あるいは僧等が法話・教話という形式で経済・経営行動には直接関係ない宗教哲学を語り、それを聞いた者が自己の経済・経営行動に沿い理解する形式がある。信奉する宗教哲学を経済・経営の行為のなかで活かすように解釈する例である。

日本では、江戸時代の寺請制度により、人々がいつれかの宗門に属さなければならないことになり、神道、仏教ともに制度化することにより本来の布教活動が衰退した。宗教の教義に触れることは少なくなり、現在では、正月、宮参り、七・五・三、葬儀などの限られた場合に人々が参詣する。

わが国では、「宗教」が何か胡散臭いものであるかのような印象を多くの人が持っているかもしれない。恐らく第二次世界大戦でわが国が敗北し、すべての価値観が否定されたことが大きな原因であろう。宗教を信仰している人は変わった人であるとか、宗教の内容や教えを知らないまま近づきたくないと思っている人も多いのかもしれない。しかし、仏教の浄土真宗、あるいは本稿で紹介した金光教等はその教えの中にプロテスタント的な禁欲的生活態度、勤労観などと非常に共通する点が多く見られる。

6. まとめ

本稿では、ベラーが問題意識としたヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』におけるプロテスタンティズムの役割を果たした宗教は何かという問いに対し、浄土真宗のみならず、ベラーが「民衆的な神道諸宗派は、心学と似た倫理的内容を持っており、農民の間で非常に強力であった」と簡単に記載した新興宗教の一つである金光教に焦点をあて、その死生観、修行についての考え方、日々の経済・経営活動について紹介した。天台本覚思想に起源をもつ浄土教、浄土宗、浄土真宗までについては、寺西が詳細に分析を行っている。浄土真宗についてもベラーが分析を実施している。しかし、浄土真宗以降の時宗、禅宗の影響についての経営者や企業の従業員に対する研究は実施されていない。また、本稿でとりあげた金光教の教えを基礎にして、実際の企業経営では一燈園の思想を反映し、日本的フランチャイズシステ

ムを構築した鈴木清一の企業家活動についての研究も今後の課題としたい。

注

(注1) 天台本覚思想は、特に能力ない凡夫でも厳しい修行をしなくても、成仏できる可能性があるとした。その理由として人は生まれながらにして成仏する可能性があるとする（一切衆生悉有仏性）からである。密教が世俗外で厳しい修行をし、現世成仏を目指したのに対し、天台本覚思想は、厳しい修行をしなくても現世成仏できる可能性があるとし、現世そのものを肯定し、宗教の易行化をもたらした。（寺西（2014）の第2節「日本における宗教の変化」P.102, P.109）

(注2) 金光教について理解するためには、金光教教典を見る必要がある。金光教教典は、金光大神御覚書、お知らせ事覚帳、金光大神御理解集から構成されている。教祖が神名によって、既述された教祖の自叙伝である。お知らせ事覚帳は、教祖が受けてきたおかげの内容とその時の神からのお知らせの内容が記載されている。金光大神御理解集は、直接教祖から教えを受けた信者（直信）が教祖から聞いた教えを書き残して伝えたもの、教えを聞き書きしたもの、すでに発行された教祖の理解に関する文献等が記載されている。金光教では、この御理解が重要な教えであり、教祖と信者の信仰に関する事例集の性格を持つものといえる。

(注3) 教祖は、神への信仰を深めるにしたがって神から「下葉の氏子」、「一乃弟子」という呼び名を与えられ、その後、神号として「文治大明神」、「金氏大明神」、「金光大明神」、「金光大権現」、「生神金光大神」と神号が改まった。金光教の奉斎神である「天地金乃神」は教祖の生神金光大神が信仰を深めることによってその名を表した神であるとされている。

(注4) 教祖が農業を辞め、願い事をする人々のために神への取次に専念するようにとのお告げがあり、このお告げのあった日、安政六年（1859年）10月21日を教団では立教の日として、下記のお告げを立教神伝としている。

この幣切り境に肥灰（農業）さしとめるから、その分に承知してくれ。外家業はいたし、農業へ出、人が願い出、呼びに来。もどり。願いがすみ、また農へ出、またも呼びに来。農業する間もなし、来た人も待ち、両方のさしつかえに相成り。なんと家業やめてくれんか。其方四十二歳の年には、病気で医師も手を放し、心配したし、神仏願い、おかげで全快いたし。その時死んだと思うて欲を放して、天地金乃神を助けてくれ。

家内も後家になったと思うてくれ。後家よりまし、もの言われ相談もなり。子供連れてぼとぼとと農業しおってくれ。

此方のように実意丁寧神信心いたしおる氏子が、世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ。神も助かり、氏子も立ち行き、氏子あつての神、神あつての氏子、末々繁盛いたし、親にかかり子にかかり、あいよかけよで立ち行き、とお知らせ。（覚書9-3 安政6年（1859）金光教教典PP.32-33）

(注5) 教祖が神から礼をされた神伝は以下である。「日天四、月天四、鬼門金乃神」は神名であり、後に神名が「天地金乃神」とであると明らかになる。「ひれい」とは「威徳」ということを意味する。

一つ、日天四、月天四、鬼門金乃神、取次金光大権現のひれいをもって、神の助かり。

氏子の難なし、安心の道教え、いよいよ当年までで神の頼みははじめから十一か年に相成り候。金光大権現、これより神に用い。三神、天地神のひれいが見えだした。かたじけなく、金光、神が一礼申し、以後のため。（覚書15-8の一部 慶応3年（1867）金光教教典P.48）

(注6) 西田天香は、一燈園の創始者。1872年(明治5年)に滋賀県長浜市の商家で出生。20歳で長浜地方の小作農を率いて北海道の開拓事業を手掛けるが、出資者と現地耕作者との争いごとの板挟みになり開拓事業から手を引く。争いのない生き方を求め求道生活に入り、無一物・路頭を原点として懺悔・下坐の奉仕、許されて生きる托鉢の生活を始める。1921年(大正10年)『懺悔の生活』を出版し、ベストセラーになる。戦後1947年(昭和22年)参議院選に当選した。1968年(昭和43年)96歳で逝去した。

参考文献

- 浅野喜起監修『鈴木清一のことば ダスキン祈りの経営』致知出版社 1997 P.20, P.21, P.26, P.29, P.32, P.33, P.36, P.38, P.46, P.102, P.145, P.146, P.171
- Bellah, R. N., *"Tokugawa religion"* First Free Press Paperback Edition 1985 (池田昭訳『徳川時代の宗教』岩波書店1996) P.42, P.46, PP.117-119, PP.232-235, PP.241-242, PP.248-249, PP.270-271, PP.292-294, PP.328-329
- 神渡良平『敗れざる者 ダスキン創業者・鈴木清一の不屈の精神』PHP研究所 2011
- 金光教本部教庁『金光大神』金光教本部教庁 2003
- 金光教本部教庁『金光教教典』金光教本部教庁 2004 PP.10-11, P.48, P.793, P.794
- 金光教本部教庁『天地は語る－金光教教典抄』金光教徒社 2009 P.7, P.19, PP.24-25, P.138, PP.140-141, P.143
- 森岡孝文「『無宗教』ということ」『あいよかけよ』447号 金光教全国信徒会 2012 PP.18-19
- 寺西重郎『経済行動と宗教 日本経済システムの誕生』勁草書房 2014 PP.4-18, PP.99-114, PP.125-137, P.241, PP.245-247, PP.267-268, P.270, PP.272-273,
- マックス・ヴェーバー著 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 2016

参考URL

- ダスキンホームページ <http://www.duskin.co.jp/> (参照日 2017.2.24)
- 一燈園ホームページ <http://www.ittoen.or.jp/about/> (参照日 2017.2.23)
- 金光教ホームページ <http://web-konkokyo.info/> (参照日 2017.2.20)